

『団袋』所収西鶴・団水両吟半歌仙注釈稿

水谷隆之

1 濁江の足洗ひけり都鳥
 2 一盃まいれ氷煮てさう
 3 読飽倦書は夜嵐にたゝまれて
 4 商人の子よ世の中の月
 5 こゝろなく行は花野の小荷駄馬
 6 大裏屋敷の残る秋霜
 7 すゝときは不動地蔵のうつくしき
 8 蘇生して何はなすらん
 9 燃しきる燈をかきたてよく
 10 二三度乳をあます小夜衣
 11 衾には千束の文の名の見へて
 12 恋より起る寺の屋さかし
 13 朝またき血ひきつゝく玉鉾に
 14 無理なる神をいはふ秋山
 15 うつれとも月はよこれぬ濁酒
 16 砧をしらす夷の風俗
 17 見よかほによるか浮木の花一つ
 18 金魚あつまる舟の藤波

鵬團鵬團鵬團鵬團鵬團鵬團鵬團鵬全團西
水鵬

『俳諧団袋』（団水編、元禄四年正月刊）に収められた、西鶴と団水による「両吟半歌仙」「濁江の」の巻の注釈である。当該期における西鶴や団水の俳諧の手法を示すことを目的とし、各句に、【語注】【解釈】を施した。西鶴と団水は、前句全体の意味や情趣を感じ取って付ける、元禄当流の「心付」を前提としたうえで、「ぬけ」とび」といった談林俳諧由来の手法を發展させて用い、前句の「物」と付句の「物」との間に客観的な意味の繋がりを保ちつつ、常套的もしくは直接的な付合語が句の中に表出するのを避けて疎句を導いている。本稿は、西鶴と団水が試みた、談林俳諧と元禄疎句俳諧の接続の形跡を示したものである。

『俳諧団袋』（団水編、元禄四年正月刊）には、「両吟」

「夜話」と題した、西鶴と団水による両吟半歌仙二巻が収められている。当巻は、浮世草子の創作を経て俳諧活動を再開した西鶴の、元禄期における数少ない俳諧資料であるばかりでなく、京の新風俳諧を実践していた団水との間で巻かれた両吟は、当時の西鶴の俳諧観や手法を知ろううえで特に重要であるが、これまでその解釈はなされていない。そこで本稿ではまず、半歌仙「両吟」についてその注釈を試みる。

元禄二年刊『俳諧番匠童』（和及著）に、「一句の心をひつからげて心に味ひ、其所に何にてもさもあるべき物をあんじ出し、我心にて作りて付ルなれば、定リたる付合の道具覚へて益なし」というように、元禄俳諧においては、古来定まった付物によらない、句全体の意味・情趣を玩味したうえでの、作者自身の新たな発想による付合が求められるようになった。『団袋』の翌年に刊行された付合語集『俳諧小傘』（松春著、元禄五年刊）も、「いにしへよりの付合の書、毛吹・便船・類船等あり。これに出る所の古きを用ひず。今当流に便ある付心・詞を集て、初門のため、此道の一助となす。此中にも打聞たる唱への古きに似たる物稀に有べし。かならずしもその詞をたゞちに用ふるにはあらず。其こゝろをもて、ぬけて付るの便也」と言い、新

たな付合語を示すとともに、語と語の固定的、限定的な関係に頼らない句作りの重要性を強調している。

こうした元禄疎句俳諧を意識して巻かれたと思しい『団袋』では、従来の西鶴俳諧に比して、常套の付合語を意識的に除いた句作りがなされている。そこで、本稿では特に、句の中心となる語を除くへぬけの手法や、語と語の間に連想を重ねることで常套の付合語を句の表から除いたへとびの手法に着目し、これを示すことにつとめた。

当巻において、西鶴と団水は、前句全体との意味や情趣の調和をはかる付け方、すなわち元禄当流の「心付」を前提としたうえで、連想の飛躍によって「さもあるべき物」（『俳諧番匠童』）を案じ出し、疎句を成立させている。あるいは、直接的な付合を避けるため連想を重ね、それにより詞の選択肢が拡がって、前句との付け肌の調和をより自由に模索できるようになった、というのが実際のところであろうか。なお、以上の手法について、詳しくは拙稿「『団袋』の西鶴―団水との両吟半歌仙について―」（『国語と国文学』八六巻七号、二〇〇九年七月）に論じた。

（凡例）

・底本には、東京大学総合図書館蔵西竹文庫本（酒二二二一）を用いた。

・『団袋』本文は、底本通りに翻刻した。【語注】【解釈】においては、資料引用にあたり、旧字体の漢字や略字・異体字などは原則として現行の字体に改め、ルビを省略し、私に句読点を施した。

・句の上に句番号を付け、該当する句の句番号の右横にウ(裏)の略号を付した。

・【解釈】では、一句の意味内容、前句との付合を中心に説明した。付合については特に、「へぬけへ」とび」といった方法に着目し、句の表に現れない語を示すことにつとめ、付合語の連想関係を矢印(↓)をもって示し、これをゴチックで表示した。

「両吟」

1 濁江の足洗ひけり都鳥

冬(都鳥)。

西鵬

【語注】

濁江 水の濁った入江。ここは大坂をいう。「江―難波」(『類船集』)。

足洗ひけり (大坂から) 抜け出した。前田金五郎氏は、「足洗い」の語義の変遷をたどり、「室町末期では、田舎の農民が都会に出て武士と立身出世することであり、近世前期では、農民に限らず、一般に卑しい身分から抜け出し

て、より以上の階層または境遇になることであつた」とする(『近世前期語の源流』『言語と文芸』六五、一九六九年七月、のち、『西鶴語彙新考』一九九三年一月、勉誠社所収)。難波が葦の名所であつたことから、「葦」と「足」を掛ける。「難波潟短き葦のふしの間も逢はでこの世をすぐしてよとや」(新古今集・恋一・一〇四九・伊勢)など。

都鳥 ここは都人の比喩。大坂から京に移住した団水を「都鳥」に見立て、その活躍のさまを言祝いだ。「堀江の川の水ぎはに。来あつゝ鳴くは都鳥。それは難波江は又隅田川の東まで」(謡曲「隅田川」)、「京―都鳥」(『類船集』)等を踏まえた表現。なお、「中冬…都鳥」(『毛吹草』)は季語、冬とし、西鶴も、「都鳥 かもめの事也。冬也。角田川に多鳥也」(『俳諧之口伝』西鶴著、延宝五年奥)とするが、『御傘』『増山井』などは非季の詞とする。

西鵬 綱吉の息女・鶴姫の諱を避けるよう、市中の鶴屋の家名と鶴紋の使用が禁じられたことにより、西鶴が一時的に改号したもの。『徳川実紀』元禄元年二月朔日の項に、「けふ市井にて、鶴屋という家名を停禁せしめられ、はた其他の雑具にも、鶴の紋ほどこすべからずと令せらる」とある。この禁令について、野間光辰氏「刪補西鶴年譜考証」(一九八三年一月、中央公論社)は、「西鶴が一時西鵬と改号したのは、元禄元年十一月刊行の『新可笑記』か

二〇〇六年九月）に論じた。

2 一盃まいれ氷煮てさう 冬（水）。

団水

【語注】

氷煮 割った氷で茶を煮て賓客をもてなした王休の故事による。「敲氷煮茗」逸人王休居大白山下、日與僧道異人往還、每至冬時取溪氷、敲其精瑩者煮建茶、共賓客飲之」（『開元天寶遺事』、その他『書言故事大全』等）。参考「敲出し又茶を煮出す氷かな 貞室」（『玉海集』〈明暦二年刊〉題「氷」）。

【解釈】

一盃召し上がってください、氷を敲き出してここに茶を煮てごさいます、の意。「都鳥」↓（水鳥）↓「氷」（水鳥「氷」類船集」、あるいは、「濁江」↓（水）↓「氷」（参考「濁江も凍は白し水の花 一口」『其袋』〈元禄二年刊〉題「凍」といった連想であろう。さらに、「氷」から「敲氷煮茗」の故事を導き、「茗（茶）」の語をぬいた。水を敲いて茶を煮て客をもてなした「敲氷煮茗」の王休ではないかと言いつつ、清貧の交わりをきどり、大坂からの賓客（西鶴）に挨拶を返したものである。なお、西鶴が下戸であったことは、「南都諸白」と書付たる一樽、はるく

ら元禄四年三月刊行の『百人一句』に至る間のことであるから、西鵬改号が全くこの法度によるものであるならば、その発令は当然元禄元年十一月以前のことではなければならない。即ち『徳川実紀』に元禄元年二月初日の令をしたのは、実は最初の発令であって、その後元禄三年二月初日重ねて令せられたものであろう」と推定する。

【解釈】

濁江（大坂）から足を洗い、この新しい地（京）にやって来たことだ、都鳥よ、の意。「濁江」すなわち大坂から京に移住した団水を「都鳥」に見立て、その活躍を喜んだ。

本書に寄せた西鶴序文には、「ふるさと難波にてふかふかたりし其ひとり、住所こゝに極めて、都は水のきよく俳の流れの絶ず」とあり、当句はこれに対応する。俳言は「足洗ふ」。なお、団水の京への移住は貞享四年中のことと推される。また、このたびの西鶴の上京（元禄三年十二月）は、元禄三年九月下旬、京の俳諧師加賀田可休が匿名で出版した『物見車』への反駁のためとみられる（野間氏『刪補西鶴年譜考証』）。団水は既に『特牛』（元禄三年十月十四日自跋）を刊行していたが、西鶴からの反駁は、翌元禄四年八月刊『俳諧石車』を待つことになる。なお、『特牛』と『石車』に関しては、拙稿「元禄初期の西鶴と団水―『特牛』を中心に―」（『国語と国文学』八三巻九号、

おくられけれど、我下戸なればさのみ嬉しからず」（『西鶴名残の友』△元禄十二年刊）巻四の五）や、「（稿者注・西鶴は）下戸なれば飲酒の苦をのがれて、美食を貯て人に喰せて楽む」（『こころ葉』団水編、宝永二年刊）などに知られる。俳言は「一盃」「氷煮」。

3 読飽倦書は夜嵐にたゝまれて
雑。

全

【語注】

飽倦^{アグム} もてあまして、うんざりする。「案倦^{アグム} 又作飽倦」

（『書言字考節用集』）。

夜嵐 夜に吹く嵐。さよあらし。

【解釈】

難しい書物を読むのうんざりしていると、その本が夜嵐のせいで閉じられてしまった、の意。「一天名月晒銀沙／童子敲氷夜煮茶／座久忽聞庭竹折／老僧持咒保梅華」（『錦繡段』「雪夜訪僧」元唐卿）に拠る。また、『類船集』「童子」の項は、「童子敲氷夜煮茶」と「錦繡段」に有」としたうえで、「寺院和尚上人のそばにつかはるる児やうのものなれば手習読書のわざなるべし」と記す。すなわち当句は、「氷煮」↓（寺の童子）↓「読書」の連想を働かせた、「寺の童子」のへぬけ句である。（老僧に仕える

中国の）寺の童子」を句の表から除くことで、同じく「敲氷煮茗（茶）」を付合に用いた打越―前句へのさわりを逃れつつ、「読飽倦書」との漢語を付けて「氷煮」への移りを良くした。「氷」↓「嵐」（風―氷解）『類船集』をあしろう。俳言は「読飽倦書」。

4 商人の子よ世の中の月
秋（月）。

鵬

【解釈】

商人の子よ、やめてしまった読書を続けろとも言おうかのように、月が世の中を明るく照らしているよ、の意。前句の読書を、「商人の子」のことに見かえて、四句目らしく軽く付けた。月明かりの下で学問をした江泌の故事（齊書、江泌伝）により、「読書」↓「月」とする（参考『類船集』「月」の項「南齊江泌、少時、力学、家貧油不能常繼、每夕随月読書、及月斜乃升屋、以尽其余光云々」）。前句の、夜嵐のせいで書物が閉じられてしまったという子供の言い訳に対し、月の光が明るく照らしているよ、と返す。漢詩を踏まえた前句に、漢故事で応じたもの。月は定座から一句引き上げられる。

5 こゝろなく行は花野の小荷駄馬

団

秋（花野）。

【語注】

こゝろなく 情趣を解するところがなく。風流心がなく。「心なき身にもあはれは知られけり鳴たつ沢の秋の夕暮れ」（新古今集・秋上・三六二・西行）。

花野 花の咲いている野。秋の花についていうことが多い。「非正花。秋の草花也。薄・萩など同意也。不可付」（『御傘』）。「中秋 花野」（『毛吹草』）。

小荷駄馬 わずかの荷をつけている馬。道中のものにも市中のものにもいう。「ここにだ」「こんだ」とも。

【解釈】

情趣を解するところもなく、美しく色づいている花野に目もくれないで通り過ぎて行くことだ、あの小荷駄馬は、の意。「商人」に「小荷駄馬」の付筋によるが、疎句付である。月の光が秋の花野を美しく照らすなか、普通なら馬から降りてそれを愛でるものであるが、そんな風流心など持ち合わせず先を急ぎ通り過ぎていく、商人の子の実直なさまを詠んだ。俳言は「小荷駄馬」。参考「馬道も下りて引する花野かな 探泉」（『雑談集』元禄四年刊）。参考「けふは安居の方にいそぐべきを、此地の人々ととどめられて／馬からは落ねど一夜花野哉 支考」（『山琴集』正徳四年刊）。

6 大裏屋敷の残る秋霜

鵬

秋（秋霜）。

【語注】

大裏屋敷 内裏屋敷。ここは、一ノ谷、安徳天皇の内裏屋敷を指すか。西鶴は、『一目玉鉾』（元禄二年刊）巻四に、「鐘掛松 ○一の谷 ○ひよとり越逆落し 源よしつね一戦の跡今にあり ○平家内裏屋敷有」と記している。

『摂津名所図会』（寛政六年序、同八十一年刊）巻八下は、「一谷 西須磨の村はづれより壱町余り西にあり。谷の広二十間計、高さ十二間（中略）秋来ぬれば柳散かゝりて波間にゆられ漂ふけしき、平氏八嶋の浦へ落足して船はしる倅。冬は霜の剣するどく、こからしに吹まじる玉あられ」と記す。なお、西鶴に「内裏」を「大裏」と表記した例は見当たらないが、団水には、「大裏を守護し奉れば」（『正月揃』貞享五年刊）巻一の一の用例がみられる。『団袋』は団水自筆。

秋霜 秋に置く霜。早霜。また、剣の異名。

【解釈】

内裏屋敷には、今では秋霜だけが残っている、の意。「花野」に「秋霜」を同季であしらった景気の句。「大裏屋敷」の指すところは分かりにくいが、「花野」↓（鹿↓一ノ谷）↓「内裏屋敷」の連想か（「花野―鹿」「鹿―一ノ谷」「内

裏一ノ谷」、以上『類船集』。とすれば、「大裏屋敷」は源平の古戦場一ノ谷にある、安徳天皇の内裏屋敷となる。貞享五年に同地を訪れた芭蕉も、「鉢伏のぞき・逆落など、おそろしき名のみ残て、鐘懸松より見下に、一ノ谷内裏やしき、めの下に見ゆ。其代のみだれ、其時のさはぎ、さながら心にうかび、俤につどひて（中略）千歳のかなしび此浦にとゞまり、素波の音にさへ愁多く侍るぞや」（『笈の小文』宝永六年刊）と、昔の合戦を偲んで愁いを述べている。義経の勇ましい鶴越のさか落しは遠い昔、今となつては、秋の花野をとほとと通り過ぎて行く小荷駄馬と、霜の剣ばかりを残す内裏屋敷の情景が、寂しく見られるのみである。俳言は「大裏屋敷」。

ウ
1すゝときは不動地藏のうつくしき
雑。

団

【語注】

すゝどし 行動的であるさま。果敢な。不動明王を「すすどし」とする形容は、「河豚魚喰^フ比はすゝどき風の色淵瀬／戸帳一重を隔つ明王 団水」（『くやみ草』団水編、元禄六年刊）にもみられる。

【解釈】

（秋霜を帯びているのは同じであつても）不動明王は果敢で烈しく、地藏菩薩のほうはやはり麗しいことだ、の意。「秋霜」↓（剣）↓「不動」の連想による（「つるぎトアラバ：秋の霜」『連珠合璧集』、「剣―不動」『類船集』）。「剣」ならぬ「秋霜」を同じく帯びた不動明王と地藏菩薩とを、「剣」の語をぬいて対照し、その烈しさと麗しさとを新たに際立たせたところが作意。折の裏に移り釈教句を出した。俳言は「不動」「地藏」。参考「甲斐山中にさまよひける夜、宿かりぬべきかたもなくて／刀さげてあやしき霜の地藏哉 破笠」（『続虚栗』貞享四年刊）。参考「餓鬼に不動のけしきあきれし／巷なる地藏姿のやさしきに」（『東日記』延宝九年刊）。

8 ヨミカヘリ
蘇生して何はなすらん
雑。

鵬

【語注】

蘇生 生き返ること。「尼いさかへり侍りて、語りけるは、『不動地藏の、我ふたつの手をひきて、冥土より返し給ふに侍る』とぞ申されける」（『撰集抄』巻九第三「安養尼之事」）。「なほ物いふこともせず、よみ帰りのごとくに、十四五ばかりまでは、いきてありし」（『古今著聞集』十七）。

【解釈】

(不動明王や地藏菩薩の様子を語っているようであるが) 蘇生したあの人、いったい何を話しているのだろう、の意。「地蔵」↓(六道)↓「蘇生」といった連想も指摘できるが(「地蔵―六道」『類船集』、「六道―蘇生」『小傘』)、地藏菩薩や不動明王の種々の靈驗譚を念頭において「蘇生」を出したと見てもよい。不動明王と地藏菩薩による蘇生譚としては、『撰集抄』巻九第三、修学院の勝算僧正の加持による、恵心の妹安養尼の蘇生が知られる。なお、西鶴は貞享四年、大坂河内屋善兵衛版『西行撰集抄』に自筆挿絵を提供している。俳言は「蘇生」。前句を蘇生した人の言葉とみなして付けた遣句体である。

団

9 燃しきる燈をかきたてよ〜
雑。

【語注】

かきたつ 灯心を掻いて火勢を強くする。

【解釈】

(蘇生した人の話をもっとよく聞こう) 燃えしきる灯をどんどんかきたてなさい、の意。灯のものと夜話とみて、「はなす」↓(伽)↓「燈」などの連想を働かせたか(参考「咄―伽」『類船集』、「伽―燈」『小傘』)。「蘇生」した

人の「はなし」によって動きだす様々な人間模様は、西鶴の浮世草子に多々描かれたところ(『西鶴諸国はなし』巻三の二、『懷硯』巻二の一、『新可笑記』巻二の六など)。灯心をかきたてて、その「はなし」に注目する人物を付けたのも頷ける。

10 二三度乳をあます小夜衣キヌ

鵬

雑、恋(小夜衣)。

【語注】

乳をあます 幼児が飲んだ乳をはく。「呢吐(チヲアマス)：小兒嘔乳也〔病源論、和名〕」(『書言字考節用集』)。「呢吐：病源論云(中略)小兒由哺乳冷熱不調所致也」(『和名類聚抄』)。「なだれ：おさない子の乳をあまして衣裳をけがしたるこそいとおしき物ぞ」(『類船集』)。「生れ出るからきりきりす鳴 旨恕／乳あまして草の袂に秋の霜 西鶴」(『わたし船』延宝七年序)。

小夜衣 身をおおう夜具。また、「さらぬだに重きが上のさよ衣わがつまならぬつまな重ねぞ」(新古今・釈教・一九六三・寂然)の歌から、人妻が夫以外の男を拒む場合に用いる語。『太平記』二二では、塩治判官高貞の妻・顔世御前が、この歌によって高師直の横恋慕を拒絶する。「これは新古今の十重第三戒の歌に、『さなきだに重きが上の

小夜衣我が妻ならぬ妻な重ねそ』と候ふ。その意にて候ふなり」(『太平記』二一)。

【解釈】

二度も三度もいとしい乳呑児が乳を吐くことだ、この夜着のうえに、の意。「燈(火)」↓「寒氣」↓「病」といった連想のもと「火―寒氣」「寒―瘧病」、以上『類船集』、「夜服―瘧病・乳母・産所」(『小傘』)等の付心を働かせたか。とすれば、当句は「病の子」のぬけ。また、「闇―灯」(『類船集』)の付合にもよるか。前句で火をかきたてた人物を、子を懸命に看病する母(または乳母)とみなし、「病の子」を言わずその様子までを示した。俳言は「二三度」。

11 衾には千束の文の名の見て

冬(衾)、恋(千束の文)。

【語注】

衾 寝る時や病床にあるとき、身体の上にかける夜具。

こは、恋文の反古で破れを継いだ紙衾。「寝間障子：俗用衾字非也、衾者寝衣之類」(『和漢三才図会』)。「曆にてやぶれをつづる古衾」(『新增犬筑波集』寛永二十年刊)。「起請継はいやぞあらゆるかみ衾 政信」(『崑山集』慶安四年刊)。「かぶりてや根篠が上の衾雪／落葉衣は綴るとも

なし」(『正章千句』慶安元年刊)。

千束の文 千たばの多くの恋文。「かかる事を師直に云ひ懸けられて、人知れぬ玉札も、はや千束にもなりぬらんと覚ゆるばかりなり」(『太平記』二一)。

【解釈】

(乳飲み子が乳をあましている)その衾には、人妻に懸想する、千束の恋文の送り主の名がみえる、の意。高師直の逸話により、「小夜衣」↓「文」。ただし、「小夜衣」と「衾」は同義語で、差合の気味がある。なお、団水に、「襖(襖障子)」を「衾」と表記した用例は見当たらない。参考「この千話文何とかくへき／恋衣様をさしたる小夜衣 西鶴」(『独吟一日千句』西鶴編、延宝三年四月自序)。参考「いろいろ道ならぬ事を書くどきて、千束おくりけるに、返しもなく、或時さしわたして、『さなきだに思ひもよらざるに、二人の子も有事を、さもしき御こゝろざし』と、恥しむるをも顧ず」(『好色一代男』巻二の三)。

鵬

12 恋より起る寺の屋さかし
雑、恋(恋)。

【解釈】

住職の恋が旦那衆にばれて、その大黒を探す寺の家捜しがはじまった、の意。「文」↓「恋」(「恋―をくる文」『類船

集』の付筋による。「寺」は、「千束の文」↓（口説↓功德）↓「寺」（「千話文―功德・口説」『類船集』）の連想に

よるか。襖障子に使われた恋文の反古にその名が見えたことから（参考「衾―障子」「反故―ふすま障子」、以上『類船集』。参考「襖障子も仮名文の反故張、上書悉やぶりしは、わけらしく見えて」「好色一代男」巻二の三）、住職のふしだらに気づいた檀家衆が、寺の家捜しを始めたのである。『好色一代女』巻二の三「世間寺大黒」に揶揄されるように、寺の住職が大黒を隠し持ち、それを責められるのは世間の常。以下のように、『西鶴独吟百韻自註絵巻』（元禄五年頃成）にも同巧の句がある。俳言は「屋さかし」。

『西鶴独吟百韻自註絵巻』

（水紅ゐにぬるむ明き寺）

胞衣桶の首尾は霞に顕れて

（西鶴自注）此程世にうたひける、「ぼんさまくちとたしなまんせ、内に大黒のいかなんどのやうに」と小歌のふしのごとく、いかに世間寺なればとて、魚鳥を喰ふのみか、見事な者をしのび抱て、後にはやゝうませける事、旦那聞付、傘壺本にして追出されし。是は見るるしき取沙汰也。

13 朝またき血^{くり}ひきつゝく玉鉾に

団

雑。

【語注】

朝まだき 朝のまだ早いころ。早朝。僧侶は、朝の勤行をする時刻である。「朝―勤行」（『類船集』）。

玉鉾 （道にかかる枕詞「たまぼこの」から転じたもの）道。または道中。ここは「血」と「法」が掛けられている。「法の道」は、仏の説いた道。仏道。「法の道を作れる石橋に名を切付」（『西鶴織留』巻五の一）。「今も弘誓の櫓拍子に、法の玉鉾多いく」（『曾根崎心中』）。

【解釈】

本来なら朝の勤行をする時刻であるが、寺を追い出された住職の血が、その歩んだ道に点々とつづいている、の意。

「寺」↓（法）↓「血」（参考「血―恋文」「法―恋ノ終」、以上『小傘』）の付筋による。恋離れ。家捜しの結果、寺を文字通りたたき出された住職が、「法の玉鉾」ではなく、自らの血をつけた「血の玉鉾」を歩むとはとんだことであると言ひ、女犯坊主を揶揄した。俳言は「血」。

14 無理なる神をいふ秋山

鵬

秋（秋山）。

【解釈】

祝うのは無理な神であるが、その神を代わりにことほいで

くれるかのように、紅葉が散り敷いた秋山であることよ、の意。「朝まだき嵐の山の寒ければ紅葉の錦着ぬ人ぞなき」(拾遺集・秋・二一〇・藤原公任)により、「朝まだき」↓(紅葉)↓「秋山」と連想し、前句の「血」を、散り敷いた紅葉の真紅に見かえた。「銚」↓(祭)↓「山の神」(「銚」祭「山の神」、以上「類船集」)、あるいは、「血」↓「神」「山」(「血」神の山「小傘」)の付筋もみられる。「無理なる神」の指すところは分かりづらいが、「小傘」にある「血」神の山の付合が、血の穢れを忌む山の神を指すとすれば(参考「房枕秋の寢覚の物狂ひ西鶴／血を忌給ふ御社の月 賀子」『蓮実』元禄四年八月序)、「血の穢れのため神を祝うのは無理であるが、やはり散り敷いた紅葉が幣となって神を祭ってくれることだ」の意か。紅葉を、神にまく「幣」とする見立ては、「この度は幣も取りあへず手向山紅葉の錦神のまにまに」(古今集・羈旅・四二〇・菅原道真)、「竜田姫たむくる神のあればこそ秋の木の葉の幣とちるらめ」(古今集・秋下・二九八・兼覧王)など。俳言は「無理」。

15 うつれとも月はよこれぬ濁酒

秋(月、濁酒)。

【解釈】

団

映つてもこの澄んだ月が汚れることはないから、濁酒であつても安心して月を愛でることができ、の意。「秋」↓「月」。「秋山」↓(紅葉)↓「うつる」。紅葉は散り「移」るうものであるが、濁酒とはいえ、そこに「映」った月影が汚れることはないと言い、さやけき月と濁り酒とを対照して際立たせた。参考「竹の切よにさくやこのはな／ぬるみきてすます濁らす水の月 西鶴」「すみ濁るをや秋の山公事／先規から見及び候谷の月」(以上、「俳諧大句数」西鶴著、延宝五年五月自序)。

16 砧をしらす夷の風俗

秋(砧)。

鵬

【語注】

砧 槌で布を打つて柔らかくし、つやを出すために用いた、木や石の台。また、それを打つことやその音をもいう。「さ夜更けて砧の音ぞためむなる月を見つつや衣打つらん」(千載集・秋下・三三八・覚性)など、「月」とともに詠みあわされることが多い。「古代は砧・虫の音を夜分にせしを、近年是を吟味して用ひず」(『俳諧石車』西鶴著、元禄四年刊)。

夷 蝦夷。北海道、樺太、千島などを総称した古名。西

鶴は、『一目玉銚』巻一「夷千嶋」に、「こさ吹て曇もやせ

ん陸奥の夷には見へじ秋のよの月」の歌をあげ、「此嶋長さ百三十里、横十五里。是より北、高麗へ十八里」と記す。また、「夷の風俗」は、「和国の風俗」（「和歌者本朝之風俗也」『玄々集』能因序）と対照した表現。「八重垣の歌盗人やくくるらん／和国の風俗すかぬ闇の夜」（『珍重集』八右斎編、延宝六年序）所収西鶴独吟百韻、「和歌は和国の風俗」にして、八雲立御国の神代のむかしより今に長く伝て」（『西鶴独吟百韻自註絵巻』元禄四年成）など、和歌を「和国の風俗」とするのは西鶴の常套句。参考「こよみえよまず春をしらまじ／けふり立夷が千島の初やいと」（『大坂独吟集』宗因著、延宝三年刊）。

【解釈】

和歌は〈和国の風俗〉であるが、その歌語の「砧」うつことさえ知らぬ、鄙びた〈夷の風俗〉であることだ、の意。「濁酒」↓（髭）↓「夷人」（「濁酒―髭」「髭―夷人」、以上『類船集』）といった連想に、「月」↓「砧」（「月―砧」（「砧―月の下」、以上『類船集』）の正風の付物をあしらう。また、「よこれぬ」に「砧をしらず」の付筋もみられる（参考「一二年秋をかさねて清書を 友雪／かやうによごす衣うつおと 西鶴」『両吟一日千句』延宝七年刊）。「胡沙吹かば曇りもぞするみちのくの蝦夷には見せじ秋の夜の月」（夫木抄・卷一三・五二二一・西行）をふまえ、

秋の月を見ない蝦夷では、月の下で砧打つこともない、とした。なお、『懷硯』（貞享四年序）序文に、「おくはそとの浜風を身にふれ、こさふく夷がほこりにもまぶれ」とあるように、西鶴は「胡沙」を胡地の砂塵とみていたようである。「濁酒」との対照によつてさやけき「月」を際立たせた前句のさまを〈和国の風俗〉とみたうえで、そんな和歌のころを知らぬ〈夷の風俗〉と言ひ、句全体をさらに対照して覆った。前句と付句のこうした内容的連関をみるとき、「濁酒―夷」は、単なる詞のあしらいを越えて、付け肌の調和の作用を含んだ〈移り〉を担う要素として機能していることが分かる。俳言は「風俗」。参考「入海三里の気色、夷が千嶋の松しやれて（中略）かゝる風景、くらべては、松嶋、磯でもあらず。いにしへの歌人の、一目見ば、残すべきに、月もあたら、影なるべしと」（『諸艶大鑑』巻八の四）。

17 見よかほによるか浮木の花一つ

団

春（花）。

【語注】

見よかほ 見た目によい顔。前句の「夷」を七福神の「恵比寿」と見て、「恵比寿面」を連想した。「恵比寿面」は、えびす神の顔のように、にこにこしている顔。円満な

福相の顔。「夷は事代主の命にて、漁獵をつかさどる神なり。俗にゑびすは蛭子の神といふもあやまりきたれり」

（『本朝智恵鑑』〈国水作、正徳三年刊〉卷二の四）。

浮木の花 仏または仏法にめぐりあうことの難しさや、きわめてまれなことのたとえである、「盲亀の浮木」および「優曇華の花」をつづめた表現。『法華経』妙莊嚴王本事品に、「仏ニ八値ヒタテマツルコトヲ得ルコト難シ。優曇波羅華ノ如ク、又、一眼ノ亀ノ浮木ノ孔ニ値ヘルガ如シ」とある。「かしこうぞ長生きして、この称名の時節に逢ふ事、盲亀の浮木、優曇華の、花待ち得たるここちして」（謡曲「実盛」）。「浮木の亀の甲は指のふし二つばかりもあまつた。かの花待得たる優曇ぐらい、出入の口鼻までも、あたかなへそ祝ひをするさうな」（『難波の只は伊勢の白粉』西鶴作、元禄年間刊）。

【解釈】

（恵比寿のようなこの）見よい顔に寄ってきたのであろうか、その浮木の枝には花が一つついているよ、の意。前句の「夷」を海上・漁業の神の恵比寿とみて、「夷」↓「見よかほ」（参考「恵比須―面」「小傘」と付け、海に浮かぶ「浮木」を出した。また、「打ちし砧の声のうち、開くる法の花心、菩提の種となりけり」（謡曲「砧」）等を念頭におくとすれば、「恵比寿は神であるので、砧打つ音で

法の花が開くことなどありはしないが、その福相にひかれて浮木の花も思わず寄りついたことだ」、の意か。花の定座。参考「花にあふぞ浮木の亀の一万句 良徳」（『崑山集』慶安四年刊）。参考「浮木にも咲かかれるや花の波重吉」（『ゆめみ草』明暦二年刊）。

18 金魚あつまる舟の藤波

鵬

春（藤波）。

【語注】

金魚 一六世紀初め輸入されたといわれ、水槽または盆地で次第に飼われるようになった。「又の日は金魚を生舟にあつめ、狂言をさせけるが」（『好色盛衰記』卷三の二）。
藤波 藤の花房。長く垂れた藤の花房が風になびいて動くさまを波に見立てた語。また、「北の藤波」といえば藤原北家を指し、その繁栄が藤の花に寄せて多く和歌に詠まれた。「普陀落の南の岸に堂建てて今ぞ栄えむ北の藤波」（新古今集・神祇・一八五四）。

【解釈】

舟に集まってきた魚はまさに金魚のよう、寄せる波は藤波のように美しい、の意。前句の「浮木の花」から、仏縁により救われた極楽浄土を思い浮かべ、「金魚」（金（こがね）―仏）「金銀―浄土」、以上『類船集』、「藤波」（普

陀落…きたの藤波」『連珠合璧集』を出し、挙句をめてたく巻き納めた。「浮木」↓「舟」(「浮木トアラバ…舟」『連珠合璧集』)をあしらう。なお、「よる」と「魚」「舟」

「波」は縁語(「よる―浪・船・淵の魚」『類船集』)。俳言は「金魚」。参考「鹿子揃の衣装川浪に移ろひ、鯉・鮒目におどろきて、自然と金魚・桜魚のごとし」(『浮世栄花一代男』△元禄六年正月刊△卷三の一)。参考「唐花の諸木、五色の玉を敷て、金鶏のはなち飼、金魚・銀魚はすいがきにあそび、是目前の極楽」(『浮世栄花一代男』卷四の一)。

*本稿は、平成二二年度科学研究費補助金(若手研究(B))による研究成果の一部である。